



半夏生鏡の裏にある真闇
初蟬の選びくれしよわが誕辰
アナコンダの皮ごはごはと虫干す
八月は鎖引きずるやうに来る
広島忌水たつぷりと実生苗
麻酔まだとけぬ唇はたるの夜
長崎忌鐘の音もろともに山河
ざざ降りの越後妻有よ大だいろ
青梅を太陽系の端に置く
希くば星飛ぶやうに了りたし
人生を仕上げるごとく梅を干す
雁や水さらさらと浮舞台
梅漬ける根性すべて出し尽くし
夏の雲孔雀の羽を曳くやうに
焼け墜ちしイカロスの翼銀河牙ゆ

*

岩井かりん
清水逍径
大野今朝子
辰野利彦
宮岡光子
石井紀美子
依田ひろ
米山節子
森山夕香
田中利政
古畑富美江
竹岡みち子
保坂季泉
白井小夜子
秦順子

新牛蒡ゆんゆん撓ひ洗はるる
ガムランの音のきりなしバナナに斑
久米村の曝書鳳凰木の花
胡瓜食む由無し錆の落つるまで
地藏沼十二代目の墓
夕涼み種痘痕ある我らかな
洗硯や学びに一世短すぎ
夏暖簾くぐれば逝きし人ばかり
室礼へる文具かざりや星まつり
横倒しの体を蝶が触れていく
飛び立てる青翅羽衣夜明け空
ポメラニアンもこもこすぎる葉月かな
穀象やもつとも遠く立志伝
マドラーは母の買ひ置き夏初め
子山羊市汗拭きもせず仲買人

市川美八子
海野恵子
松井弓
太田薫
木幡ティ
水野星闇
坂本アサ子
佐竹伸一
河合照子
渡辺悠月
塩澤祐子
ハン・バーグマン
村上紬
佐々木重昭
鈴木美代子

巻頭言「岳」九月号には「みんなて読むー宮坂静生俳句一句鑑賞」をたくさんの方から書いていただいた。感激している。米寿祝いとして最高にうれしい。わが半生の傑作は「岳」を仲間たちとともに育て上げたことだと思っている。これだけは銘記されよう。「岳」五十年近く、俳句の歴史の舞台に優れた俳人が出た。これは私を含めて今月米寿界限の祝いをしていただくときにあたり、最高の贈り物であったと実感している。その上、これからの「岳」に十代から九十代まで誌友が増えつつあることも喜ばしい。

俳句は切れ目なく僅かでも詠み続ける。休むと、詠む勘を戻すのに苦労する。

闇とは漠然と知っているようで本当は知らない。夏の闇とは何か。

半夏生鏡の裏にある真闇 岩井かりん

どこに闇があるのか。半夏生草、カラスビシャクが生える頃、七月の初め、一年で一番暑くなる時だ。透明な鏡の裏に闇がある。鏡の裏とはいえ、こは面と向かっている鏡の裏側を想定したものか。裏へ廻ってみても意味がない。私の生きている裏側である。確実に死がある。死にいたる、想定できない闇がある。次第に現実味を帯びてきた恐ろしさを「真闇」と言った。さりげないいい方が迫真的だ。

初蟬の運びくれしよわが誕辰 清水 道徑

私の誕生日に初蟬が鳴いた。偶然でもうれしい。素朴な感

激が読み手にまっすぐに伝わる。人柄が明るい。大らかだ。アナコンダの皮ごはごはと虫干す 大野今朝子
「アナコンダ」は中南米の密林に棲む水生の巨大な蛇。ぎよっとする。作者は世界の珍宝の持ち主である。風を入れないと微が生えるものか。日本流の虫干し概念を吹っ飛ばす。

広島忌水 たつぷりと実生苗 宮岡 光子
広島忌の句にして前向き。「水をください」という哀しい常套のフレーズではない。実生の木の苗を育てている。水を求めた罹災者のことを思い、その化身のような木にたつぷりと水を遣る。歴史を透視した優れた目がある。

麻酔まだとけぬ唇ほたるの夜 石井紀美子
唇が借り物。歯医者さんでの治療の余韻のように口の回りもわもわ。螢が飛び交う夜もどこか浮遊感がある。これは身体感覚のリアルな句ではなく、甘い物語へ誘われる感じ。

長崎忌鐘の音もろともに山河 依田 ひろ
長崎の坂の上、浦上天主堂の鐘の音は全てを包んでぐわんぐわんと響く。そこに洗われた山河が放擲される。信仰の街とはそのようなもの。それにしても「こよなく晴れた青空を」は哀しい。忘れ難い永遠の歌である。

さざ降りの越後妻有よ大だいろ 米山 節子
「越後妻有」とは新潟県十日町、津南町エリアの呼称。雪深い地である。ここでは三年に一度、「大地の芸術祭越後妻

有アートトリエンナーレ」と呼ぶ、里山を舞台にした芸術祭が催される。掲句の「だいろ」は蝸牛。大雨の中の大きな蝸牛詠。蝸牛が角を思い切り伸ばし「いい雨だ、いい雨だ」（いい湯ではない）と雨を寿ぐさま。作者は地貌俳句詠が巧みな、新潟の米作り名人。

青梅を太陽系の端に置く 森山 夕香
構図が見事。青梅が太陽系を構成する青梅座のようだ。るるるんぱりぱりの青梅の艶にも躍動感がある。跳躍が大きい。

希くば星飛ぶやうに了りたし 田中 利政
大宇宙にある夜、綺麗に線を引いて星が流れる。そのように生涯を終わりたい。若い日にそんな夢想を抱いたことがある。作者は詩人としても活躍した誠実この上ない御仁。いつかしみじみした思いとして願うことになる。

今月の秀句

八月は鎖引きずるやうに来る 辰野 利彦

囚人が重い鎖を引きずり、収監されている独房から向かってくる。八月は日本人にとり、敗戦までに二度の原爆の試練を受けた月。重い思いは戦争体験者ほど全身の重圧になっている。戦後産まれは知識として理解しても実感はない。掲句の作者ほどの病めるような嫌な感じは、次第に世の中から消えてゆく。人は情感よりも理屈で生きる。体験知の情には常に一縷のヒューマニズムがあるが、明るだけの世の中は危い。巧い句だ。

高見順が詩「黒板」で書いた「中学生の時分／私が好きだった若い英語教師が／黒板消しでチョークの字を／きれいに消して／リーダーを小脇に／午後の陽を肩さきに受けて／じゃ諸君と教室を出て行った／ちようどあのよう／私も人生を去りたい／すべてをさつと消して／じゃ諸君と言って」以前もここに書いたが、これは少し恰好が良すぎるかな。

人生を仕上げるごとく梅を干す 古畑富美江
また人生の句。これははいねい極まりない梅干し作り。ほんとかな、大袈裟なのが面白い。人生はもう少し複雑。

雁や水さらさらと浮舞台 竹岡みち子
旅館などで引いた水上に舞台がある。雁が渡って来る晩秋にお芝居を堪能しているものか。そこそこのお芝居。映画「国宝」ほど濃艶ではない。「さらさら」感が小品としてまとまっている。

梅漬ける根性すべて出し尽くし 保坂 季泉
驚いている。人懐こい糸魚川の女流俳人、保坂季泉さんが突然ご逝去とは、信じがたい。楽しい思い出ばかり。黒坂愛子さんともども面倒見がよく、句は上々。丁寧な梅を漬けたのであろう。愛子さんによると、盆に実家の草取に行き、疲れが出て、八月十八日、唐突に八十四歳でご逝去。結核の持病があった由。ご冥福を祈る。

夏の雲孔雀の羽を曳くやうに 白井小夜子
夏の雲だけに美しい。幾分夕映えがかっているものか。秋近しの気配もあろう。一夏にこんな句を残したいの思いが

感じられる。自分の句を作る作者で、気持ちに安定感がある。

焼け墜ちしイカロスの翼銀河牙ゆ 秦 順子

「悼 上條恒彦君」とある。イカロスはギリシャ神話に出る名工ダイダロスの子。父が発明した翼で空を飛ぶが、太陽に近づき過ぎて翼が溶けてしまい海に墜落したという。作者は若い頃「緑地」という詩のグループを上條たちとやっていた仲間。いわば姉御。上條は長野県東筑摩郡朝日村出身。周知の俳優であり、声量豊かな歌手としてミュージカル「ラ・マンチャの男」などへの出演で知られる。七月二十二日、八十五歳で燃え尽きた。「銀河牙ゆ」は真冬を思わせる。「夏銀河」くらいにしたいが、作者の心中を偲びそのままにした。

地味ながら滋味もある新牛蒡の「ゆんゆん焼う」底力

今月の秀句

新牛蒡ゆんゆん焼ひ洗はるる 市川美八子

新牛蒡詠とは珍しい。「ゆんゆん」がよく育った長い牛蒡を思わせ、楽しい擬音である。畑の中の流れであろうか。作者は市民運動に傾倒し、これと決めたなら生涯ぶれない信念の人。魯迅を愛し、都立大学の恩師竹内好に親しみ、戦後の中国文学華やかになりし頃からの話題に富む。土を愛する。信州小諸が故郷。頭にいっぱい知恵が詰まり「河鹿ちゃん」が愛称であったか。俳句歴は長い。この辺で本腰を期待したい。

洗硯や学ぶに一世短すぎ 坂本アサ子

七夕詠。晩年を意識し出す。やりたいことが山のよう。本も読みたい。ロカ岬にも行きたい。俳句も上手になりたい。この世は短い。前向きな作者に共感。勉強家に違いない。

夏暖簾くぐれば逝きし人ばかり 佐竹 伸一

小津か黒沢か。渋いところで東野栄治郎にでも出て貰いますか。一杯と行きたい気持ちで、麻の暖簾を潜る。ああ懐かしい。これはこれはみなさんお元気でしたか。奥から笠智衆がおうと手をあげる。向こうへ行行った人ばかり。

室礼へる文具かざりや星まつり 河合 照子

七夕の日。床の間に軸、玄関に花と、部屋の飾りへの配慮が「室礼」。この語はこのごろ広まったもの。

横倒しの体を蝶が触れていく 渡辺 悠月

坂道を歩行中なのか。急いでいる途上なのか。野に寝そべっているのか。蝶がふわっとぶつかり、また離れる。「私、蝶に愛されてる」と、淡いことを思う。不安定感を一句にまとめたのが初投句、十八歳の作者とは驚いた。私も初投句は十六歳の時であったことを思い出す。

飛び立てる青翅羽衣夜明け空 塩澤 祐子

「青翅羽衣」とはきれいだが、柑橘類や桑などに寄生し、樹液を吸う昆虫。害虫なのが切ない。カメムシ目アオバハゴロモ科。夜明け空が初々しい。熱心この上ない作者。

ボメラニアンもこもこすぎる葉月かな ハン・パウン

ドイツ原産の小型犬がボメラニアン。「すぎる」は通り過

ガムランの音のきりなしバナナに斑 海野 恵子

バリ島やジャワ島の音楽ガムラン。鍵盤打楽器の音がきりもなく続く。バナナに斑が入ったとは、熟しきった形容か。ちよこまかしくない大らかさ。詠み方が素直。着実に力が付き、自在になってきた。「岳」事務局での緻密な活躍もありがたい。

久米村の曝書鳳凰木の花 松井 弓

沖繩詠。明や東南アジアとの交易により栄えた琉球王国。その交易を担った人々が住む久米村。貴重な文書を曝書する真夏に、街路樹は赤い蝶が舞うごとき鳳凰木の花で彩られる。特異な句材を自在に詠んで句境を広げている。

胡瓜食む由無し錆の落つるまで 太田 薫

胡瓜を食べてさっぱりしたい。「由無し錆」とは心理詠である。なぜか晴れ晴れしない気持ちの鬱。なぜと原因がわかるほどのことではないが、新鮮な胡瓜でもばりばり食べて、くらしいの薄いつまみ方が巧い。

地藏沼十二代目の墓 木幡 テイ

墓が十二代目とは、この大胆なあてずっぽうが面白い。沼の主は屋からげろげろとやり出す。みちのくにはやたらありそうな「地藏沼」という呼称も馴染む。テイさん元気。

夕涼み種痘痕ある我らかな 水野 星閣

戦後、天然痘ワクチン接種があった。腕に痕が残る。一九五六(昭和三十一年)年から二十年間、一九七六(昭和五十一年)年には接種が中止されている。端居して、腕にある痕を見せ合ったりして。星閣さんの得意分野かな。戦後八十年の一コマ。

ぎたことであろう。どうと言うこともないが、季語「葉月」が小型犬の毛の具合とバランスがいい。小品の味わい。

穀象やもつとも遠く立志伝 村上 紬

穀象虫と付き合っている昔風なお百姓か。出世というようなこともなく、十年一日のごとく生きて生涯を了る。ここにも人はいる。これこそ多くの人生ではないかという。

マドラーは母の買ひ置き夏初め 佐々木重昭

コーヒーや飲み物を混ぜる棒がマドラー。母がいなくなったの感慨か。こんなことまで心配してと顧みたもの。さりげないことへの思いを言い留めたもの。

子山羊市汗拭きもせず仲買人 鈴木美代子

下伊那の子山羊市詠。毎年、この地で行われるとのこと。牛や馬は詠われても、子山羊市とは珍重。

他に推薦候補作をあげる。

戦争を知らざる物怪八月来	堤 保徳
夏果つや幹の瘡蓋痒さうな	野口美智子
外輪船にドラムが響き琵琶湖夏	樋上 照男
一日を労ふごとく夏の暮	樋口 玲子
八月の海より瞬る黒真珠	田中 優子
洛中の樟の土用芽著きかな	栗原利代子
ツイゴイネルワイゼン桃を齧る夜	竹内 薺
長すぎる屋敷老いたる心持	柿谷 有史
河童忌や髪黒々と若き父	久保美智子
人類に戦争といふ蟻地獄	松澤あきら